

あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。 (『申命記』七章7節)

聖書によれば、アブラハム、イサク、ヤコブといったイスラエルの父祖たちは羊の群を率いて移動する牧羊民であった。ところが、飢饉を避けて逃れたエジプトの地で、彼らは奴隷にされてしまう。このイスラエルの民がモーセに率いられて出エジプトを果たし、荒野の四〇年を経て、「乳と蜜の流れる」約束の地で土地を獲得するまでの物語は『創世記』に続く五つの書に詳しく記されています。この物語の史実性は考古学や歴史学によって証明されないため、これがどれほど史実に基づくのかは不明である。いずれにせよ、古代イスラエルの人々はこのような奴隷解放の物語に民族の起点を見出し、これを忘れてはならない民族伝承として子孫に伝え続けたのである。

古代イスラエル人は自分たちを神に選ばれた民と考えたが、自分たちが他の民よりも優れているとか、先祖が偉大であったとか、というのではなかった。民族の過去を美化して、その歴史を誇るのではなく、逆に、自分たちは他のどの民よりも貧弱であり、エジプトでは奴隷の民であった。それゆえに、神に選ばれたのだ、というのである。これがイスラエルの選民思想の特徴なのである。メソポタミアとエジプトという古代西アジアの二大文明に挟まれた辺境の地で、目に見えない唯一の神を信じた弱小の民の強靱な精神がここにあった。自己の弱さをさらけ出せる強さである。